

「シン経済教育」プログラムに関するよくある質問

FAQ（導入をご検討の先生方へ）

以下は、「シン経済教育」（社会を支える4つの基盤）プログラムの導入をご検討中の先生方から寄せられることが多いご質問と、その回答をまとめたものです。本プログラムは現在も改良を重ねている発展途上の取り組みです。良い点だけでなく、現時点での課題についても率直にお伝えします。

プログラムの考え方について

Q. 「肌感覚で経済を理解する」とはどのようなことですか。テストの点数のように測れるものですか。

A. 「肌感覚」とは、生徒が経済社会の仕組みを自分の実感として捉え、「なぜそうなっているのか」を考えられるようになることを指します。定期テストの点数のような単一の指標で測ることは想定しておらず、本プログラムはあくまで授業を「設計」するための土台です。理解度をどのように可視化するかは、現場での実践を積み重ねながら今後さらに検討していく段階にあります。

Q. 「市場・インフラ・生活・政策制度」という4つの基盤は、厳密な分類なのですか。労働や社会保障のように、どちらにも当てはまりそうな項目もありますが。

A. 4つの基盤は厳密な分類学ではなく、生徒にはバラバラに見える単元同士が「つながっている」と感じるための教育上の仕掛けです。境界が重なって見える項目があってもかまいません。生徒に分類そのものを暗記させることは想定していません。

Q. 学習指導要領との関係はどうなっていますか。

A. 学習指導要領の内容を否定するものではなく、それを教える際の「構造」を組み替えようとする試みです。単元の内容そのものを差し替えるのではなく、単元同士のつながりを見せる授業デザインとしてご活用いただけます。

導入方法について

Q. 教材をすべて使わないといけませんか。一部だけ取り入れることはできますか。

A. 全講をまとめて導入する必要はありません。まずは1コマ、あるいは導入部分の問いや事例だけを差し替えるところから始めていただけます。骨格（4つの基盤・6つのキーワード）は変えず、入口の問いや事例だけを学校・地域の実情に合わせて調整する「部分導入」を推奨しています。

Q. 中学・高校のどちらでも使えますか。

A. 高校（公共）向けの授業案、中学（公民）向けの授業案をそれぞれ用意しています。中学向けは「物語」、高校向けは「意思決定のロールプレイ」を中心に、学校段階に応じた具体化を行っています。

Q. 経済学を専門としない教員でも実施できますか。

A. 「普通の先生が、普通の生徒に」教えられることを設計の前提にしており、教員が経済学の専門家である必要はあ

りません。専門的な知見が必要な場面のために、相談できる窓口やネットワークの整備も今後進めていく予定です。

学習評価について

Q. 生徒の理解度はどのように確認すればよいですか。

A. 各講について、3段階（A・B・C）の到達度を示す観点別ルーブリックを用意しています。単純な穴埋め・選択式のテストで知識を再生できるかを見るのではなく、具体的な場面で考え、判断し、説明できるかを段階的に見取る評価です。中学版では、各講のルーブリックが学習指導要領のどの内容に対応するかも明記しており、通知表の観点別評価にそのまま活用いただけます。定期テストや入試との接続については、今後複数校での運用を積み重ねながら整備していく予定です。

効果・実証について

Q. 実際に授業で効果はありましたか。

A. 実践校では、生徒の「経済とは何か」という定義が、お金を中心とした理解から、人と人との「つながり」や「信頼」を中心とした理解へ変化した例が報告されています。ただし、すべての生徒が同じように深い理解に到達したわけではなく、浅い理解にとどまった生徒がいたことも事実として報告されています。実践はまだ少数校にとどまっており、より多くの学校・学年での検証を積み重ねている段階です。

Q. 「肌感覚」に頼ることで、かえって誤った理解につながる心配はありませんか。

A. ご指摘のとおり、実感に基づく理解（肌感覚）が必ずしも正しい理解につながるとは限らない、という点は重要な課題として認識しています。実際に、もっともらしいものの浅い理解にとどまった例も報告されています。そのため、「なぜそうになっているのか」を掘り下げて考えさせる振り返りの発問を、教材・教師用資料に今後さらに明示していく予定です。

Q. 学力差の大きいクラスでも実施できますか。

A. 物語やロールプレイ、絵を見て気づきを言葉にする活動など、文字や論理だけに頼らない複数の入口を用意しており、多様な理解のしかたに対応できるよう意識して設計しています。ただし、学力差が大きい教室でどこまで効果があるかは、今後さらに検証を重ねていく課題です。

なお、中学版には、「吾輩はカレーである」という副読本を用意しています。副読本には生徒用のワークシート、教師用のマニュアルが付いています。経済にあまり関心がない生徒でも無理なく導入できる教材です。活用してみてください。

今後の展開について

Q. 導入後、相談できる窓口はありますか。

A. 経済教育に関するメールマガジン等を通じた情報発信に加え、今後は専門家に直接質問・相談できる窓口の整備も予定しています。

Q. 実践した内容を共有したり、他校の事例を知ることはできますか。

A. 実践事例を蓄積・共有するためのデータベースや、報告のための簡易フォーマットを用意しています。実践いただいた際は、ぜひ知見をお寄せください。